

研究の窓

分配的正義の諸原理

保 坂 哲 哉

フレッド・ハーシュの *Social Limits to Growth* が刊行されてから12年の歳月が過ぎた。都留重人監訳の邦訳が現れたのは、原著が出て4年後のことであった。各章の冒頭に監訳者による簡潔な解説が収められ、それだけ読んでいけば全体の議論の要点が短時間のうちに頭に入るという大変親切な訳書である。原著自体が、冒頭の第1章序論で、豊かさの逆説、分配の強制、不本意ながらの集産主義に関する問題提起から始めて議論の要約を行い、これらを3部に分けて論じたのち、第4部で展望と結論を述べるという、大変よく整理された構成をとっている。

先進社会の経済が、経済成長の持続を通じて豊かになればなるほど満たされない欲求がふえ、分配問題の重要性が高まるのに、その解決を支えていた道徳的遺産はすでに減耗し、経済成長の持続によって時間が経てば貧困者も成長の成果の分配にあずかってその地位が向上することを根拠に主張されていた体制の道徳的正統性も失われてしまう。そこで分配問題を解決するための基盤ともなるべき新たな社会的道徳律の登場が必要となる。分配政策にかかわる経済学者にとっても、ジョン・ロールズが *A Theory of Justice* で展開したような考察が不可避である。およそこのようなことをハーシュは述べていたように思う。

ハーシュは翌1978年、ジョン・ゴールドソープとの共編で *The Political Economy of Inflation* を刊行することになるが、その直前の1月11日に46歳で世を去り、新著の冒頭に寄稿者11人の連名で短い追悼の辞が載せられた。

『成長の社会的限界』に対する学界の評価については詳らかではないが、7年を経たのち11人の論者によって行われた研究論文集が、*Dilemmas of Liberal Democracies* と題して出版されたのを知り、入手して読むことができた。そのなかで、福祉分野での著作も多いレイモンド・プラントの論文は、分配政策に関する道徳哲学ないし社会哲学的側面の整理がなされるとともに、功利主義的立場からの議論も紹介、展開されていて興味深く読んだ。

中心的論点のひとつは、分配問題と社会的道徳律の関係にかかわっている。プラントは、“Hirsch, Hayek, Habermas: dilemmas of distribution” という論題を掲げていることから分かりますとおり、分配問題の解決のための社会的道徳律の

必要性を説くハーシュの考え方と、そのような必要性を認めないハイエクの考え方を対比させながら、分配問題解決のための代替的アプローチを論じ、そのひとつとしてのハバーマスの「ゆがめられないコミュニケーション」論の限界や難点を指摘する。ハバーマスの難点のひとつは、そういう状況の成立の可能性、手法にかかわり、第2はハバーマスの背景にヘーゲルの *Sittlichkeit* をみ、その現実的可能性を疑問視することに由来する。

プラントが功利主義的アプローチに注目するのは、その価値多元主義のゆえであるが、そのなかでも有望な戦略として、ブルース・アッカーマンに注目する。1981年の著書 *Social Justice in the Liberal State* にその議論が展開されており、ハイエクの分配の分野での無政府状態が克服されて、分配原理が明示的に論議され、手段的なかたちながらひとつの具体的な分配原則が提示される。それは「一次財に対する平等なアクセス」と表現され、基礎的ニーズの充足の保障とも言いかえることができる。この結論は、ケインズ、ベヴァリッジなど「不本意ながらの自由主義者」と呼ばれる人々の考え方に対応し、ロールズの正義原理のような目新しさには欠ける。ただプラントがアッカーマンに注目するのは、彼により道徳的資源が自由主義社会にも現実に存在し、権力に頼らなくとも分配問題を解決する可能性があることが示された点にあったようである。

分配的正義に関する論議が現代において高まりをみせていることは、福祉国家のひとつの到達点としての現代の時代状況を反映しているものと解される。この問題へのアプローチや考え方における対立は決して小さくはないが、権力から解放された理性的な説明やコミュニケーションが、紛争解決、相互理解ないしは合意形成の手続きとして必要だと考える点では、かなり共通の認識が共有されているように思われる。

(はさか・てつや 上智大学教授)